

# 女三宮における朱雀院

——父親の過度な愛情——

李 芙 鏞

はじめに

『源氏物語』には「入内・降嫁・齋宮・齋院・一品宮など、種々様々な形式」の皇女の一生が描かれているが、皇女における父との関係はどのように描かれているのであろうか。

『源氏物語』の書かれた平安時代に、娘の裳着、結婚など公式的な儀式に際して、父親は儀式の場所の準備から各部門の担当役の選定に至るまで、中心的な役割をしていた。物語に描かれている人生儀礼の中で、皇女の父親はどのような役割を務めているのであろうか。また、それは娘の人生にどのような影響を与えているのであろうか。『源氏物語』の多様な人物の中でも、朱雀院と女三宮の親子関係は注目に値する。父親と娘が異例なほど強く結ばれているからである。女三宮は光源氏への降嫁によって、一時的に父親の強い影響力から離れたかのように見える。しかし、柏木との密事とそれによ

る女三宮の出家は、父親との強い密着を再確認させるものであった。そもそも女三宮の結婚に夫婦関係より後見関係が期待されていたことは、女三宮の悲劇を予告していたのである。以下、女三宮の結婚と朱雀院の五十の賀を中心に、二人の親子関係を捉えることにする。

## 一 女三宮の降嫁

女三宮の存在が最初に言及されるのは、「若菜上」巻冒頭の朱雀院による女三宮の婿選びが語られる時である。出家を前にして、女三宮の結婚が唯一の心残りである朱雀院は、考え抜いた結果、女三宮を源氏に結婚させる決心をする。

(朱雀院)「この世に恨み遺ることもはべらず、女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。さきざき人の上に見聞きし

にも、女は心より外に、あはあはしく人におとしめらるる宿世あるなん、いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならん御世には、さまさまにつけて、御心とどめて思ひ尋ねよ。その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはべり、三の宮なん、いはけなき齡にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすらへむこと、いといとうしろめたく悲しくはべる」と、御目おし拭ひつつ聞こえ知らせさせたまふ。

(若菜上④二〇)

女三宮は早く母藤壺女御を失い、女房や乳母たちに養育されてきた。父朱雀院は、そのような女三宮にとつて自分だけが唯一の「頼もしきもの」であるだろうと述べている。朱雀院の考えでは、女三宮は父だけを頼りにしている幼い子供である。朱雀院自らの女三宮への認識が窺える部分であると言える。

先行研究では女三宮の幼さに関連して様々な議論が成されてきた。武者小路辰子氏は幼稚性の持つ「無限の力」に注目し、女三宮の「源氏像と個別の生存を得ていく」女性像は幼稚性に基づいていることを指摘する。また、柏木の手紙を隠しきれなかったことから女三宮の幼女性性を読み取る高橋亨氏は、「幼女性性の罪は、女の存在を物語の主題として露呈させ

ていったのだ」と指摘する。

先行研究の指摘から示唆される点は多くあるが、女三宮の幼さについては、登場人物個人の性格ということだけでなく、人物間の関係に注目する必要がある。朱雀院を父とする皇女であるという点を考慮に入れることで、物語のなかで女三宮の幼さやそれを補おうとする朱雀院の父親像が浮かび上がるだろう。また、女三宮が弱い性格の女性として描かれる理由を父と関連付けて考えることができるだろう。「若菜上・下」巻を中心に朱雀院と女三宮の姿を追ってみよう。

まず、「若菜上」巻導入部の朱雀院の言葉である。

(朱雀院)「(前略)今、はた、またなく親しかるべき仲間となり睦びかはしたまへるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚かなるに添へて、子の道の闇にたちまじり、かたくななるさまにやとて、なかなか他のことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。内裏の御事は、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ、本意のごと、いとうれしくなむ。(後略)」(若菜上④二一〜二三)

出家を前にして、朱雀院はこれからの女三宮が心配でならない。「子の道の闇にたちまじり」という文は『源氏物語』

のなかで最も多く引用された。紫式部の曾祖父にあたる藤原兼輔の和歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰和歌集』雑一)を踏まえた表現である。同歌は『大和物語』四十五段にも見える。

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内に奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしめすらむなど、いとかしこく思ひなげきたまひけり。さて、帝によみて奉りたまひける。

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返しありけれど、人え知らず。

『後撰和歌集』と『大和物語』から窺える歌の成立事情については議論されているところであるが、兼輔が娘桑子を醍醐帝に入内させた頃に、娘の行く先を案じて帝に詠み奉った歌という『大和物語』の成立背景は、『源氏物語』の理解に示唆を与える。朱雀院も娘を降嫁させる心配を、引歌を踏まえて表現しているのであろう。女三宮を案ずる心がいかに大きなものとして朱雀院の心を占めているのが読み取れよう。

朱雀院は夕霧などを婿の候補として考えてみたこともあるが、最後に決めた相手は、源氏である。

(朱雀院)「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほし  
たてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな。  
ただ人の中にはありがたし、内裏には中宮さぶらひたまふ、次々の女御たちとても、いとやむごとなきかぎりものせらるるに、はかばかしき後見なくて、さやうのまじらひいとなかなかならむ。この権中納言の朝臣の独りありつるほどに、うちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれど、いと警策に、生ひ先頼もしげなる人にこそあめるを」とのたまはず。  
(若菜上④二七)

その理由は、源氏が幼かった紫の上を育てて、妻として迎へ入れたように、女三宮を「はぐくむ(育む)人」としての婿を探していたからである。朱雀院の皇子東宮も多くの求婚者の中で、

かの六条院にこそ、親さまに譲りきこえさせたまはめ  
(若菜上④三九)

と、源氏への降嫁を勧めていたが、その理由も朱雀院の願

と同様に源氏の「親さま」を意識したものであった。女三宮の結婚生活は、朱雀院と女三宮の父娘関係を源氏と女三宮の夫婦関係にスライドさせて、父親の後見をしてもらうことが期待されていたのである。女三宮の結婚生活が柏木との密通という悲劇に結びつけられることには、夫婦関係であるべき源氏との関係が、最初から危さを内包していたことが窺える。朱雀院が源氏を女三宮の伴侶として選んだ理由、女三宮を「はぐくまむ人（育まむ人）」としての夫源氏の役割は、結婚後の源氏と女三宮の描写においても看取することができる。

姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は、今は、公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮をばいと心苦しく、幼からむ御むすめのやうに、思ひはぐくみたてまつりたまふ。

（若菜下④一七八～一七九）

本文には今上帝の女御として大人びた姿になっている明石の女御と対照的に、女三宮の幼い性情が指摘され、源氏が女三宮を「むすめ」のように「はぐくみ（育み）たてまつ」ることが語られている。

「若菜上」巻の女三宮の六条院降嫁を振り返ってみると、女三宮の降嫁に際して、多大な調度品が準備されていた。

かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まゐりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。内裏に参りたまふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡りたまふ儀式いへばさらなり。

（若菜上④六一～六二）

幼い娘を源氏に預ける不安な心情が多大な調度品に現れているのであろう。朱雀院の指示によって手配された調度品には、光源氏への表敬と共に、「また難のある女三の宮の周りだけは固めて魅力をまそうという朱雀院の思い」が込められている。まだ幼い女三宮の性格を補うかのように、準備された調度品は父親の愛情の深さを象徴しているのであろう。

以上、娘女三宮の人生儀礼の中、結婚をめぐる朱雀院の役割について考察したが、続いて、父親朱雀院の五十の賀における父と娘の関係について考察する。

## 二 朱雀院の五十の賀

平安時代貴族社会において、算賀を祝うことは大事な儀式であり、その主催は子女やそれに準ずる人が行うのが恒例で

あった。歴史上の記録には四十の賀を始めとして十年単位で、何十歳かの時に、長寿の祝いが行われ、九十の賀までの記録が見える。<sup>12</sup>「若菜下」巻には、すでに出家している朱雀院の五十の賀が描かれていることが注目に値する。登場人物の年齢があまり記載されない『源氏物語』の中で、「算賀は意識的な区切り」<sup>13</sup>を表すからである。また、『故実拾要』第六巻の「四十御賀」に「親の賀ハ子孫ナト祝ス。師ノ賀ハ弟子ナト祝ス」と記されているように、算賀の主催が子孫の主体であるという側面から考えると、算賀の考察は親子関係を探る手掛かりを与える。「若菜上」巻には光源氏の四十の賀の叙述が見えるが、その四十の賀開催の様子が詳しく語られることとは対照的に、女三宮夫婦が主催する朱雀院の五十の賀当日の場面は、簡単に言及されるだけである。

朱雀院の五十の賀に関する叙述は、女三宮への対面を願う朱雀院の希望から始まる。娘との対面を願う朱雀院の意向を聞き、源氏は次のように、

ついでなくすさまじきさまにてやは、這ひ渡りたまふべき、何わざをしてか、御覽せさせたまふべき、と思しめぐらす。このたび足りたまはむ年、若菜など調じてやと思して、さまざまの御法服のこと、齋の御設けのしつらひ、何くれと、さまことに変わることもなれば、人の

御心しらひども入りつつ思しめぐらす。

（若菜下④一七九―一八〇）

朱雀院に参上するきっかけとして、「このたび足りたまはむ年、若菜など調じてや」と、朱雀院の五十の賀を計画するのである。さらに、朱雀院からの女三宮の琴の音を聞きたいという意向を、冷泉帝から伝え聞いた源氏は五十の賀のために、女三宮に琴も熱心に教える。

宮は、もとより琴の御琴をなん習ひたまひけるを、いと若くて院にもひきわかれたてまつりたまひにしかば、おぼつかなく思して、（朱雀院）「参りたまはむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとて琴ばかりは弾きとりたまひつらん」と、後言に聞こえたまひけるを、内裏にも聞こしめして、（帝）「げに、さりとて、けはひことならむかし。院の御前にて、手尽くしたまはむついでに、参り来て聞かばや」などのたまはせけるを、大殿の君は伝へ聞きたはひて、年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこめることもあるを、そのけはひはげにまさりたまひにたれど、まだ聞こしめしどころあるもの深き手には及ばぬを、何心もなく参りたまへらんついでに、聞こしめさんとゆるしなくゆかしがらせたまはんは、

いとほしたなかるべきことにも、といとほしく思して、  
このごろぞ御心とどめて教へきこえたまふ。

(若菜下④一八二)

このように、五十の賀を準備することを通じて、源氏は女三宮に手ずから琴の稽古を授ける。賀の準備は二人が親密に触れ合う時間を設けるものであった。

調べことなる手二つ三つ、おもしろき大曲どもの、四季につけて変るべき響き、空の寒さ温さを調へ出でて、やむごとなかるべき手のかぎりを、とりたてて教へきこえたまふに、心もとなくおはするやうなれど、やうやう心得たまふまに、いとよくなりたまふ。(源氏)「昼はいと人しげく、なほ一たびも揺し按ずる暇も心あわただしければ、夜々なむ静かに事の心も染めたてまつるべき」とて、対にも、そのころは御暇聞こえたまひて、明け暮れ教へきこえたまふ。

(若菜下④一八一〜一八二)

女三宮に琴を教えるために、源氏は紫の上にまで「御暇聞こえたまひて」、琴を教えることに熱中し、明け暮れ女三宮のそばを離れない。女三宮にとって、この時期は結婚生活の中で、「最も輝いた充実した時代」<sup>15</sup>であり、源氏と女三宮には

「二人がはじめて共有した濃密な、充実した時間」であつたに違いない。しかし、この幸せな時間でさえ、女三宮は、源氏と夫婦というよりは、源氏の娘のように後見される様子である。

源氏が力を入れた甲斐があり、女三宮の琴の上達は、正月に催された六条院の試楽の場面に描写される。

琴は、なほ若き方なれど、習ひたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよく物に響きあひて、優になりにける御琴の音かなと大将聞きたまふ。(若菜下④一九〇)

しかし、女三宮は源氏から教えられた優れた琴の音色を、父親の前で披露する機会がなかなか得られない。賀の宴が三回に渡り、延期になるからである。<sup>17</sup>史実のなかでも賀の延期は「非常に稀有な事態」<sup>18</sup>にしか見受けられないが、物語の中で三度の延期が描かれるのは、読者の注意を引こうとする作者の意図を反映したものであろう。

①院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふことどもいとちたきに、さしあひては便なく思されて、すこしほど過ぎしたまふ。二月十余日と定めたまひて、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。(若菜下④一八三)

②かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は、大将の御忌月にて、樂所のこと行ひたまはむに便なかるべし、九月は、院の太后の崩れたまひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、姫宮いたくなやみたまへば、また延びぬ。

(若菜下④二六六)

①、②の本文には賀の遅延された、しかるべき理由が具体的に叙述されている。しかし、そこには以上の表面的な理由のほかに、柏木からの懸想文の発見と女三宮の懷妊という事柄が絡んでいたことが注意される。

まだ朝涼みのほどに渡りたまはむとて、とく起きたまふ。(源氏)「昨夜のかはほりを落として。これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置きたまひて、昨日うたた寝したまへりし御座のあたりを立ちとまりて見たまふに、御褥のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧するに、男の手なり。

(若菜下④二五〇)

源氏に柏木の文を見つけられたのに、また事態を知覚せず、ただ隠れるだけの女三宮の姿からは、彼女の幼さが確認されよう。

宮は、何心もなく、まだ大殿籠れり。あないはけな、かかる物を散らしたまひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまをうしろめたしとは見るかし、と思す。

(若菜下④二五〇—二五一)

文の書き手が柏木であることを看破した源氏は、柏木よりも、まず「あないはけな」と、たあいなき女三宮の幼い性情を恨む。すでに中世の物語批評書である『無名草子』の「あさましきこと」に「女三の宮の、右衛門督の文、源氏に見えたること」と言及され、不注意で弱い性格について言及されていることも同様な視点からであろう。女三宮の未熟さが強調されるこのような事態を経て、五十の賀の開催はさらに延びる。

そのうち、五十の賀の開催は朱雀院の女二宮である落葉の宮に先を越されてしまう。

衛門督の御あづかりの宮なむ、その月には参りたまひける。太政大臣ゑたちて、いかめしく、こまかに、ものものきよら、儀式を尽くしたまへりけり。督の君も、そのついでにぞ、思ひ起こして出でたまひける。なほなやまし

く、例ならず病づきてのみ過ぐしたまふ。

(若菜下④二二六)

落葉の宮主宰の賀は、実際は太政大臣が采配をふるい、儀式を尽くした盛大なものであった。そこには夫である柏木も参加していたことが語られ、源氏主催の五十の賀に音楽の名手柏木の不参加であったことと対照的である<sup>20</sup>。また、女三宮に比べて、「父院の愛情（庇護）が期待できない」<sup>21</sup>落葉の宮の方がむしろ娘としての役割を整然と果たしているのである。女三宮は父親の愛情にふさわしい娘としての役割を果たすことができないのである。

紫の上の発病、女三宮と柏木の密事の発覚などにより、十月には必ずと決めていたにもかかわらず、五十の賀は行われる兆しが見えない。しかし、父親の長寿を祝うべき娘の女三宮は、夫の源氏に賀を催促する一言も添えることができない状況である。

夫による父親の賀の開催という文脈は『落窪物語』にも窺うことができる。『落窪物語』には、姫君の父親の七十の賀が、夫道頼（大納言）の後見によって盛大に行われる場面が見える。

今年なむ七十になりたまひけると聞きたまひて、大納言

の思しける、「行先遠く、またもしてむとおぼゆる人ならばこそ、のどかになども思はめ。人は、しきりたるやうに思ふとも、七十の賀せむ。わがせむと思ひし本意とげむ。懲ずべき限りは、あまたたびしてき。うれしとおぼゆることは、ただ一たびにてやみなむは、いとかひなし。死にての後には、よろづのことすれども、誰か見はやし、うれしと思はむとする。こたみばかりのこと、力の堪へむ限りせむ」と、思ほし立ちて、いそぎたまふ<sup>22</sup>。

大井田晴彦氏は『落窪物語』の例を取り上げ、「幸福となつた姫君が父に盛大な孝養を尽くし」、「自分を顧みなかつた父に孝心を見せるところに、姫君の理想性」を読み取る<sup>23</sup>。賀の開催が娘としての役割の披露を意味するという大井田氏の指摘は『源氏物語』にも適用することができるだろう。女三宮の夫源氏による朱雀の賀が重ねて延期されることは、落窪の姫君の場合と対照的である。

やがて物語の時間は十一月になったが、賀は開催されない。三度目の延期である。

③参りたまはむことは、この月かくて過ぎぬ。二の宮の御勢ひことにて参りたまひけるを、古めかしき御身さまにて、立ち並び顔ならむも憚りある心地しけり。(源氏)

「十一月はみづからの忌月なり。年の終はり、はた、いともの騒がし。また、いとどこの御姿も見苦しく、待ち見たまはむをと思ひはべれど、さりとてさのみ延ぶべきことにやは。むつかしくもの思し乱れず、あきらかにもてなしたまひて、このいたく面瘦せたまへるつくるひたまへ」など、いとらうたしと、さすがに見たてまつりたまふ。

〔若菜下④二七一～二七二〕

いよいよ年の最後、十二月になって、もはや賀を延ばすことはできなくなつた。算賀はその年を過ぎると開催ができなくなるからである。物語では年末の頃、ようやく五十の賀の開催について言及される。

御賀は、二十五日になりけり。かかる時のやむごとき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御伸らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にとどこほりつることだにあるを、さてやむまじきことなれば、いかでかは思しとどまらむ。女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも魔訶毘盧遮那の。

〔若菜下④二八四～二八五〕

しかし、朱雀院の五十の賀については、十二月の二十五日に賀が行われたという記述だけで、「若菜上」巻の源氏の四十の賀のような、詳しい儀式の次第や調度品の描写はない。音楽の名手柏木の重忠と、それによる左大臣家の人々の嘆きのなか、五十の賀は時間に攻められるかのように開催され、悲しげな情緒にまで包まれる。

〔若菜上〕巻には若菜の献上を重ねて最初に四十の賀を主催した玉鬘の聡明さが際立つように構成されていたが、「若菜下」巻の女三宮の賀は延期を重ね、年末に追われるように開催されてしまう。そこには父親の賀を準備すべき娘としての役割を果たせなかつた女三宮の姿が露呈されていると言えよう。玉鬘が四十の賀を開催することによって、光源氏家の養女として、また鬚黒家の北の方としての自分をみごとに披露したことは異なり、女三宮は源氏に頼り、賀が三度も延期されたことを見ていることしかできない。柏木との関係が露呈した今、女三宮は父親の愛する自慢の娘としての役割を担うことができない。

〔若菜上〕巻には源氏の四十の賀が、「若菜下」巻には朱雀院の五十の賀が語られるが、父親の長寿を願う算賀を背景に、源氏の養女玉鬘と朱雀院の娘女三宮は対照的に描かれ、女三宮の娘としての役割の弱さを際立たせている。また、その根底には、女三宮と源氏との結婚に、擬似親子関係を期待して

いた朱雀院の娘への過度な愛情が働いているのであろう。

### 三 薫の誕生と出家

すでに言及したように、出家前の朱雀院の女三宮への心配は、「子の道の闇にたちまじり」という表現を通じて表現されていた。柏木との密事が源氏に知られ、薫を生んだ女三宮は、再び父親に対面したい希望を述べる。五十の賀があつてからまもなく、朱雀院は「子の道の闇」を痛感せざるをえない。その経緯について考察してみよう。

六条院の息子の誕生を祝い、盛大な祝儀が行われるなか、女三宮は苦しい心情を抱えている。

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、  
ならばぬことの恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こ  
しめさず、身の心憂きことをかかるとつけても思し入れ  
ば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。

(柏木④三〇〇)

密事による不義の子、薫を産んだ女三宮は「このついでにも死なばや」と思うほどつらい心境であり、苦悩する。女三宮の悩む姿はやがて朱雀院にも伝えられるのである。

山の帝は、めづらしき御事たひらかなりと、聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かくなやみたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。

(柏木④三〇三)

父親に女三宮の無事出産のことが告げられたが、女三宮が病気で悩んでいるということを聞き伝えられた朱雀院は、仏道修行に精進することができない。仏道に専念すべき朱雀院は、女三宮から目を離せず、つねに娘の状況に気を揉んでいるのである。出産したのち氣力を失った女三宮も父親に對面したいと願う。

さばかり弱りたまへる人の物を聞こしめさで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて、年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院のいと恋しくおぼえたまふを、(女三宮)「またも見たてまつらずなりぬるにや」といたう泣いたまふ。かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ、いとたへがたう悲しと思して、あるまじきこととは思しめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

(柏木④三〇三)

朱雀院は、女三宮を「親さま」に源氏に預け、自分は仏道

修行に励むつもりであった。しかし、西山の御寺での修行中にも、娘への「異常な執着」<sup>25</sup>を断ち切ることができず、六条院に関する情報を「常に「聞こしめす」<sup>26</sup>様である。父親に對面したがる娘の意向を聞き伝えられた朱雀院は、出家者という立場を忘れ、再び父親としての役割を果たさずにはいられない。朱雀院は人目を憚り、「夜に隠れて」下山し、六条院を訪れる。

かねてさる御消息もなく、にはかにかく渡りおはしまいたれば、主の院驚きかしこまりきこえたまふ。(朱雀院)「世の中を、かへり見すまじう思ひはべりしかど、なほ、まどひさめがたきものはこの道の闇になむはべりければ、行ひも懈怠して、もし後れ先だつ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみに残らむとあぢきなさに、この世の譏りをば知らで、かくものはべる」と聞こえたまふ。(柏木④二〇三—二〇四)

消息もなく、突然、六条院を訪れるほど、朱雀院は娘に對する心配に急ぎ立てられていたのである。朱雀院は幸福な結婚生活を願ってやまなかつた娘を、自らの手で出家させることになる。井上真弓氏は朱雀院の態度から「父の娘への管理が「子を思ふ道」からの逸脱であり、「子の惑ふ道」への転

換を示している」と読み取り、藤原兼輔の歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』雜一)の源氏物語的変容を指摘する。幼い娘への心配のあまり、父親役を期待して源氏に降嫁させたことが、逆に若い娘の出家という結末を迎えさせたのである。

女三宮を出家させた後、朱雀院は「すべてこの世を思し悩まじ」と俗世の煩惱から離れようと努めるが、娘に對する執着を振り払うことはできない。

山の帝は、二の宮もかく人笑はれなるやうにてながめたまふなり、入道の宮もこの世の人めかしき方はかけ離れたまひぬれば、さまざまに飽かず思さるれど、すべてこの世を思し悩まじと忍びたまふ。御行ひのほどにも、同じ道をこそは勤めたまふらめなど思しやりて、かかるさまになりたまひて後は、はかなきことにつけても絶えず聞こえたまふ。

御寺のかたはら近き林にぬき出でたる筈、そのわたりたかうなの山に掘れる野老とらなどの、山里につけてはあはれなれば奉れたまふとて、御文こまやかなる端に、(朱雀院)「春の野山、霞もたどどしけれど、心ざし深く掘り出でさせてはべる、しるしばかりになむ。

世をわかれ入りなむ道はおくるとも同じところを君

もたづねよ

いと難きわざになむある」と聞こえたまへるを

(横笛④三四六―三四七)

むしろ、朱雀院は女三宮の出家した後に、「はかなきことにつけても絶えず」連絡を取っている。朱雀院は、山の近くから得られる筍、野老などをことさら送ることによって、娘への愛情を表現する。植物の野老(ところ)に「所」が掛けられているこの歌には、「同じところ」つまり、娘と共に極楽浄土へ向かう念願が示されている。

「同じ所」という表現が和歌に使われた『源氏物語』の外例は、「宇治十帖」の「総角」巻の薫の歌に見出すことができる。現世での因縁が来世まで続き、極楽浄土に生まれ変わることを願う意味が込められている。「総角」巻の薫の歌は、

あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ  
(総角⑤二二四)

とあって、薫は糸を巻く総角に喩えて、いつまでも大君と一緒にいたい心情を現している。薫の歌に永遠の合一を願う意味として使われているように、朱雀院の歌には、同じく出家

して仏道に精進している娘と、極楽浄土という同じ所に向かつて修行していきたいという願いが込められているのである。しかし、出家している朱雀院の、これほど娘のことで悩む姿が描かれるのは、「帝」さえも逃れるすべのない「子を思ふ道」の「闇」の広がりを実際立たせる<sup>28</sup>ことでもある。「若菜下」巻の最後、朱雀院の五十の賀の描写が「女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも魔窟毘盧遮那の。」(若菜下④二八五)と、御寺の誦経の響きのなか、女三宮を案じる朱雀院の心情の描写で終わるゆえんである。

おわりに

平安時代の女性の人生儀礼に、父親や後見役は重要な役割を担い、とりわけ母方に有力な後見者のいない皇女の場合には父親の存在が大事な意味を持っていた。しかし、そういう時代背景を考慮に入れても、女三宮の結婚における朱雀院の役割は、通常を程度を越えるものとして叙述されている。女三宮の結婚に際して、物語のなかで女三宮の内面が描かれることはほとんどない。朱雀院は親代わりの夫、光源氏を娘の結婚の相手として定めたが、結果的に、女三宮の結婚生活は朱雀院の期待した通りの幸せなものにはならなかった。朱雀院の愛情が娘の女三宮に必ずしも結果的によい方向に作用し

たとは言えない理由である。

一方、女三宮は娘として父親の五十の賀を率先して主催すべきであるが、柏木との密事が源氏に発覚するなど、娘としての役割を果たせない状態に陥る。朱雀院の五十の賀は年末に急ぎ立てられてようやく開催されるが、華やかな長寿の祝いであるはずの五十の賀について、物語の本文には柏木の病による沈んだ雰囲気だけが叙述されている。

その後、出産した女三宮は出家の意志を表明する。しかし、女三宮が自らの出家を遂げようとする時にも、父親の朱雀院の存在は常に意識されている。西山の御寺で仏道に励むべき「山の帝」朱雀院は、娘を案じたあげく、何の予告もなしに六条院に現れるのである。女三宮の自立の道程は遠くに持ち越されているようである。

注

- 1 勝亦志織『物語の〈皇女〉——もうひとつの王朝物語史』（笠間書院、二〇一〇年二月）三九頁
- 2 服藤早苗『成育儀礼と父親』『平安朝の父と子』『中公新書』（中公論社、二〇一〇年）八八頁
- 3 人生儀礼とは「誕生・成人（結婚）・算賀（長寿の祝い）・薨送などの人生の節目ごとに行う儀式・典礼」であり、通過儀礼

- とは「入団式・承認式・入信式などのように、共同社会のある資格を得るために必ず通過しなければならない儀式」である。本稿で使う「人生儀礼」という言葉は林田孝和氏の定義による。「林田孝和『源氏物語の人生儀礼——誕生とその前後——』（今井卓爾（外編）『時代と習俗』『源氏物語講座』第五卷（勉誠社、一九九一年）二〇四～二〇五頁）
- 4 以下、「源氏物語」の本文引用は「阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校注・訳）『源氏物語』（一）』（六）（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年～一九九八年）」による。引用の際には括弧の中に（物語の巻名・巻数・頁）の順に表記する。
  - 5 武者小路辰子「女三の宮像——幼さへの設問——」『日本文学』第二十三巻第七号（日本文学協会、一九七四年十月）八九頁
  - 6 武者小路辰子、前掲論文、八九頁
  - 7 高橋亨「紫式部『源氏物語の〈女三の宮〉——幼女性の罪』『国文学』解釈と教材の研究』第二七巻第三号（學燈社、一九八二年九月）六七頁
  - 8 伊井春樹（編）『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年）四三五頁によつて数えた。
  - 9 高橋正治（校注・訳）『大和物語』『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年）二八三～二八四頁
  - 10 伊井春樹「源氏物語の引歌——兼輔詠歌の投影——」紫式部学会（編）『むらさき』第十七輯（武蔵野書院、一九八〇年七月）、岡山美樹「堤中納言兼輔の「人のおやの心は闇にあらねども・・・」の詠歌背景について——『大和物語』第四五段、後

- 撰集』一一〇二番、『兼輔集』を通して——」『三松 大学院紀要』第二号（二松学舎大学大学院文学研究科、一九八八年三月）など。
- 11 河添房江「女三の宮物語と唐物——メディアとしての室礼と唐物」『源氏物語時空論』（東京大学出版会、二〇〇五年）一七〇頁（初出）『源氏研究』第十号（二〇〇五年）
- 12 小町谷照彦「算賀」（山中裕・鈴木一雄（編）『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年十二月））
- 13 永井和子「講演」『源氏物語』の年齢意識——光源氏四十賀の現実性」紫式部学会（編）『むらさき』第四十一輯（武蔵野書院、二〇〇四年十二月）一一頁
- 14 故実叢書編集部『故実拾要』改訂増補 故実叢書』第十卷（明治図書出版、一九九三年）三八二頁
- 15 沢田正子「源氏物語の楽の音」『枕草子の美意識』（笠間書院、一九八五年）二九三頁
- 16 三村友希「二人の紫の上——女三の宮の恋」『姫君たちの源氏物語——二人の紫の上』（翰林書房、二〇〇八年）二二頁
- 17 三度の延期に関わる本文の引用には、①、②、③の記号をつけた。
- 18 相澤佐与「若菜巻の賀宴の準拠——源氏四十賀と朱雀院五十賀」『実践国文学』（実践国文学会、一九九三年三月）一〇三頁、相澤氏は「権記」に記された長保三年、東三条院詮子の四十の賀の延期を準拠として提示している。
- 19 久保木哲夫（校注・訳）『無名草子』「新編日本古典文学全集」（小学館、一九九九年）二二九頁
- 20 「若菜下」巻の終りには「かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど」（若菜下④二八五）と柏木の病勢による不参加と沈んだ雰囲気の中で行われる賀の実情が描写されている。
- 21 湯浅幸代「落葉の宮をめぐる人々——一条御息所・小野の律師・小少将——」久保朝孝・外山敦子（編）『端役で光る源氏物語』（世界思想社、二〇〇九年）一五四頁
- 22 稲賀敬二（校注）『落窪物語』「新潮日本古典集成」（新潮社、一九七七年）二二九～三三〇頁
- 23 大井田晴彦「賀宴」（増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成』第十一巻「源氏物語の行事と風俗」（風間書房、二〇〇二年）
- 24 川名淳子「若菜巻 光源氏の四十賀について——玉鬘主催の賀を中心に——」『立教大学日本文学』（立教大学日本文学会、一九八五年七月）七七～七八頁。川名氏は、光源氏本人によつて拒まれた四十の賀を、玉鬘が若菜を進上する年中行事を重ねた形式に催したのは「玉鬘の聡明さ」を現していると指摘する。
- 25 中西紀子「源氏物語」における密着父娘愛——朱雀院と女三の宮の紐帯をとおして——」『王朝文学研究誌』第十二号（大阪教育大学大学院王朝文学研究会、二〇〇一年三月）三五頁
- 26 陣野英則「聞こしめす」朱雀院の聴力」（室伏信助（監修）上原作和（編）『朱雀院・弘徽殿太后・右大臣』人物で読む源氏物語』第十一巻（勉誠社、二〇〇六年）三九九頁
- 27 井上真弓「大君と八宮の「迷妄」を探る」『狭衣物語の語りと引

用』（笠間書院、二〇〇五年）四七七頁、井上氏は八宮の「子の道の闇」を論じるなか、朱雀院の例を含む『源氏物語』全般における藤原兼輔歌の引用を確認している。

本宮洋幸「朱雀院の苦惱——「若菜・上下」巻の方法から宇治十帖へ——」（室伏信助（監修）上原作和（編）『朱雀院・弘徽殿太后・右大臣』「人物で読む源氏物語」第十一巻（勉誠社、二〇〇六年））二九九頁